

氏族の論理と名前の論理

■プロテスタントと祖霊名の「内化」

ここ2回の連載では、西ケニアの牛牧民キプシギスの人々の祖霊名を取り上げて来た。前回は、プロテスタントの一派であるAGC (African Gospel Church) に属し、教区では「牧師」として認知された熱心な老信徒、故ジョエル・キマニ・アラップ・チェブクウォニが、伝統的な靈魂再来の信仰通りに、息子の息子である新生児に再来した例を紹介した。

キプシギス語では、クリスチャンとは、通常、伝統的信仰心と非妥協的なプロテスタント信徒のみを指す。だが彼らも、会派の公式の教義に反して誰もが靈魂の再来を信じ、密かに新生児に祖霊名を与えている—「牧師」さえも。ただし、この事例(1997)で重要なのは、型通りに新生児に再来した祖先の父称(アラップ・チェブクウォニ)ではなく、そのクリスチャン名(ジョエル)を赤ん坊の祖霊名とした事だ。

我々はここから2つの重要な意味をくみ取ることができる。つまり、第1には、AGCが現在でもキプシギスの伝統的な祖霊観と靈魂再来の観念を人々の心から排除できないでいる事。第2には、今では形式的には総ての人々もっているクリスチャン名を祖霊名に用いて伝統と妥協を図り、AGCがいわば祖霊名をその信仰に「内化」しようと試みた事である。

■再来するのは祖霊か名前か

「牧師」の事例には、更にもう一つ逸してはならない重要な点がある。それは、この場合、新生児に再来するのは単に祖先の名前ではなく—あるいはそれと共に—靈魂であると観念されていると考えられる事である。

連載第67回では祖霊名が「*oindet*の名前」(*kainetap oindet*)とも「*kurennet*の名前」

(*kainetap kurennet*)とも呼ばれる事に触れた。*oindet*とはまだ個人として特定される、個性をもった祖先である。一方、*kurennet*とは、直訳すれば「呼ばれる者」、つまり名付け儀礼(「祖霊呼び」、*kurset*)で次々に呼び上げられる先祖の名前なのだ。要するに、*kurset*は名前(だけ)が知られている先祖といえる。

また、同じ回で、狂人であった先祖でも妊婦の夢枕に立つか妊婦に憑依した場合には、名付け儀礼でその名前が呼び上げられ、新生児に再来した祖先として認められる事を、レジナという妊婦の具体的な事例で紹介した。

ただし、レジナの夫ラボソとその関係者は、「*oindet*の名前」という観念、ひいては祖霊の再来という観念そのものを否定した。そして、赤ん坊がもらったのは「*kurennet*の名前」であり、したがって赤ん坊が同名の先祖の性質を受け継ぐことはないと主張した。だが、ハイエナに食い殺された祖先が自分に再来したがゆえに、まるで犬っころだと人々が嘲るハイエナだけを無闇に恐れているジョン・キプタラム・アラップ・マリティムの例を見れば、ラボソたちの見方が少数派であることは明らかだろう。

「牧師」の事例でも、彼の遺族は、「*kurennet*の名前」という論理を持ち出して靈魂再来の観念を否定しようとは少しもしていない。逆に、ジョエルというクリスチャン名をあえて祖霊名に採用したのは、赤ん坊に再来したのが「牧師」自身であることを明確に自覚し、その事実を尊重しようとしているがゆえである。

更に、次のように靈魂再来の観念と関わる事実がある。新生児に再来した祖霊のアラップ某という正式名ではなく、渾名や、Polisi (警官)とかKeya (KAR, King's African Rifles、つまり英国小銃隊)などの職名に由来する、その人

物の通り名などで家族が赤ん坊を呼ぶ場合が往々ある。この慣行は、最近の死者の実名を口にする事を忌避し、遠回しに「昨日の人」(chichigonye)と呼ぶ慣行とも重なり合う。

■「氏族名＝姓」という常識の罨

つまり、正式の幼名であるキプシギスの祖霊名では、氏族全体の集合性よりもその内の直近の系を排他的に重視する意識が卓越しているのだ。また、キプシギスの命名法の特徴の一つは、イニシエーションによって、人生の途中でアラップ某(某の息子)という父称を成人名として獲得する事だ。その含意は前回述べた通りだが、ここでも系が明瞭に意識がされている。

キプシギスと対照的なのが、ウガンダのガンダ人やソガ人の間に見られる、氏族がその成員に一定数のストックから割り振る固有の個人名群だ。そして、ガンダやソガの場合と似ているのは、M.モースが、個人の役柄(personage)ないしは人格(person)が氏族によって決定されていたとした、プエプロ・インディアンや北西インディアンの名前のシステムである。彼は後者を例証として、「未開」社会には役柄はあっても自己(self)の観念はなく、人格の観念でさえも脆弱だと主張したのだった[M.モース「人間精神の一カテゴリー」、M.カザリス他(編)『人というカテゴリー』1995]。

だが、ガンダやソガでも氏族が管理するそうした氏族固有の名前は、或る個人の複数の名前の一つに過ぎないとして、中林伸浩はモースの見解を退けている。しかも父系のソガには、個人の複数の名前の一つとして、母の氏族名(例：ムスワ)とほぼ同じで、母方の血縁を示す男女一対の姓に似た名前(ムスワ/ナスワ)が存在する。一方、父系の氏族を表示する類の名前はない[中林伸浩「名前と氏族」、上野和男・森謙二(編)『名前と社会』1999]。

中林は、次いで、この特殊な名前をタンザニアに住む母系のカグル人のウェレクワ(welekwa)という範疇の名前と比較する。ウェレクワ名も個人の複数の名前の一つで、父の母

系氏族から貰う男女一対の名前である。T.O.バイデルマンによれば、カグル人の複数の名前は外側に公式的で中立的な名前が、そして一番内側に最も私的で内密な関係を示すウェレクワ名が位置する、同心円構造をなしている[前掲書]。

単系出自社会の個人は、第一義的で法的な出自集団ではない第二義的な出自集団とは、情愛や儀礼の脈絡で意味がある「補足的親子関係」をもつ。父系のソガと母系のカグルの事情はちょうどボジとネガの関係になるが、個人名(姓)となるのはいずれも私的で内密な関係にある方の氏族(出自集団)由来の名前なのだ[前掲書]。

そこで中林は、次のように述べている。アフリカでは自己の一義的で法的な氏族の公的なアイデンティティは、或るカグル人自身が語ったように、名前で確認するまでもなく自明なのだろう。だから、名前は氏族名に比べて本来「私的」なのだ。補足的親子関係でのみ、第二義的な氏族名が「私的」な名前になる事実はそれを証明する。中国や朝鮮の姓が(自己の第一義的な)氏族名だという常識に反して、「アフリカの氏族と祖名継承のあり方は姓や家族名になじみにくいものようである」[前掲書]。

ただし、同じ父系の祖〔霊〕名継承でも、氏族が名前を保有・管理する集合主義的なガンダ型と、個別の系における継承を焦点とする線条的なキプシギス(カレンジン)型では、大きな違いがある。そして、中林のいう通り、その背景には氏族の団体性、婚姻規制、家族形態、祖霊観などの差異を見る事ができる。

一言この点に言及すれば、キプシギスの氏族の特徴は、一つの土地に集住せずに成員が方々に散らばって住む事である。しかも、一人の男性の複数の妻たちの家は、世界の他のどの民族よりも互いに遠く離れ、「家財産制」によって法的・経済的な自立性が高い。これまで縷々述べてきた霊魂再来の観念と共に、これらが個別の直近の系での祖霊名継承が優先される大きな要因となっているのである。

(こんま とおる 神奈川大学社会人類学)